論文概要

モンゴル国ウランバートル市における日本の子どもたちを取り巻く生活環境に関する研究

～課題と支援ニーズを抽出し、支援モデルを追究する～

学籍番号：　13MD0060

氏　　名：　櫻井　良平

1. 研究の目的と方法

私は、研究フィールドとして選定したモンゴル国ウランバートル市において、5年超の滞在経験を有し、日本の子どもたちの生活環境が深刻な状況にあることを痛感してきた。モンゴル国の治安はあまり良いとは言えず、安心して安全に、かつ健全に学んだり遊んだりすることのできる、定期的な機会へのアクセスに非常な困難を抱えている。それは、マイナス30～50度まで外気温の低下する長い冬の期間においては、特に顕著となる。

現地の学校に通っても、言葉や文化の違いから、少なからずいじめなどの問題にも遭遇しているという。日本の友だちとも会えず、孤独感を味わうこともあるそうだ。食文化やサービス、マナー、価値観などの大きな違いも、子どもたちにストレスを蓄積させる原因となっている。しかし、そのようなストレスを発散できる場が乏しいのが現状だ。

日々、切実な課題に直面している子どもたち、そしてその家族の生活環境が、少しずつでも改善されていくことを望んでいる。本研究を、研究のための研究として終わらせてしまうのではなく、近い将来、私自身がウランバートル市において生活する時節が訪れたならば、研究の成果を基に、支援方策を実践していきたい。

本研究はまた、研究対象こそ便宜的に日本人の親を持つ子どもたちとしているものの、モンゴル人はもちろん、様々な国籍を有する子どもたちの生活環境の改善に寄与し得る可能性を秘めるものである。

以上のような背景と問題意識から、本研究に取り組むことを決意した。

次に、本研究の目的についてであるが、子どもたちの生活実態や課題、支援ニーズを明らかにし、支援モデルを試案することである。そのために、子どもたちや家族、日本人コミュニティーを中心に調査を行った。

そして、研究方法として、3つの調査方法を採用した。

1つ目は、海外における日本の子どもたちについてまとめられた資料・文献を通じた先行研究調査である。海外の例を紐解き比較考察を行うことは、研究を進める上で有効である。

2つ目は、現地での聞き取り調査であり、3つ目は、アンケート調査である。本研究対象者の母数が少数であることから、個別具体的事例についての情報を直接取得し検討できる点において、両者の調査手法は有効性が高い。

2. 論文の構成

第 1 章 序論
　第 1 節 研究の背景と問題意識
　第 2 節 研究の目的
　第 3 節 研究の方法
　第 4 節 論文の構成
第 2 章 モンゴル国と日本との交流史概略
　第 1 節 モンゴル国の概要
　第 2 節 モンゴル国と日本国との外交史
　第 3 節 モンゴル国における特筆すべき日本との関係
第 3 章 海外における日本の子どもたちの教育事情
　第 1 節 官民による教育支援
　第 2 節 海外教育における問題
　第 3 節 まとめ
第 4 章 現地調査
　第 1 節 調査の目的と方法
　第 2 節 調査の枠組み
　第 3 節 調査結果
第 5 章 アンケート調査
　第 1 節 調査の目的と方法
　第 2 節 調査の枠組み
　第 3 節 調査結果
第 6 章 考察
　第 1 節 現地調査結果の分析
　第 2 節 アンケート調査結果の分析
　第 3 節 支援モデルの考察
第 7 章 結論と今後の課題
　第 1 節 結論
　第 2 節 今後の課題
参考文献・資料一覧

3. 論文の概要

第 1 章では、研究の背景と問題意識、研究の目的や方法について述べた。

第 2 章では、モンゴル国と日本との交流史について概観した。

第 3 章では、海外における日本の子どもたちの教育事情と題し、海外の事例を引用し論じた。主に資料・文献調査を通して、現在のモンゴル国の状況だけに囚われることなく、海外での状況との比較考察を加えた。

第 4 章では、現地での聞き取り調査について、調査の目的や方法、枠組み、調査結果の順にまとめた。

第 5 章では、アンケート調査について、調査の目的や方法、枠組み、調査結果の順にまとめた。

第 6 章では、考察と題して論じた。まず、現地調査およびアンケート調査について、結果分析を行った。子どもたちの置かれている生活環境や、抱える課題、支援ニーズについて、明らかにした。その上で、在るべき支援モデルについて考察した。支援ニーズに応えるためにはどのような支援モデルが妥当であるのか、試案を述べた。

第 7 章では、結論と今後の課題として、本論文の締め括りとした。

現地調査では、延べ 33 人を対象に、子どもたちとウランバートル市において生活を送る日本人の両親はもちろん、教師経験者や JICA 職員、JICA ボランティア、NGO 職員、日系企業社員等、幅広い対象に、詳細かつ具体的、実践的な聞き取り調査を実施した。さらに調査対象を日本人のみではなく、日本とモンゴル国双方での滞在経験の長い、モンゴル人高校生・大学生、教師にまで広げたことにより、子どもの視点かつ比較考察という観点からも、有益な調査を行うことができた。

同じアジアに位置する、近くて遠い国モンゴル国。その首都で生活を送る 50 人程の子どもたち。彼らは非常に切迫したニーズを有しているが、支援は不十分である。その両親の多くは、日本の国益となるモンゴル国との友好関係構築に尽力している。子どもたちは、将来の両国間の懸け橋となる人材へと成長していくだろう。モンゴル国は豊富な鉱物資源と広大な国土を背景に、急速な経済発展の途上にある親日国である。また、南北を中国とロシアという大国と接する内陸国であり、地政学的にも重要な位置を占めているのだ。

子どもたちの健やかな成長と発達において、良質な学びや遊びの機会が確保された、安全かつ安心して過ごすことのできる生活環境の整備は、必要不可欠である。それが、生まれ育つ地域によって制限を受けるようなことがあってはならない。